

令和4年 7月1日	農作物病害虫発生予報 7月	山口県病害虫防除所 山口県農林総合技術センター
--------------	--------------------------------	----------------------------

～目 次～

I	予報の概要	1
II	予報	
	【主要病害虫】	2
	【その他の病害虫】	16
III	参考(予報の見方、気象予報)	17

I 予報の概要

農作物名	病害虫名	予想発生量	現 況	
			平年比	前年比
イネ	いもち病(葉いもち)	平年並	平年並	前年並
	紋枯病	やや多	—	—
	縞葉枯病(ヒメトビウンカ)	平年並	平年並	前年並
	セジロウンカ	やや少	やや少	多
	トビイロウンカ	平年並	平年並	前年並
	コブノメイガ	平年並	平年並	前年並
	斑点米カメムシ類	やや多	やや多	多
カンキツ	かいよう病	平年並	平年並	前年並
	黒点病	やや少	やや少	少
	ミカンハダニ	多	多	多
	ミカンサビダニ	平年並	平年並	前年並
ナシ	黒斑病	少	少	前年並
	黒星病	平年並	平年並	少
果樹全般 (モモ、ナシ、リンゴ)	カメムシ類(チャバネカメムシ、ツヤアカメムシ、クサギカメムシ)	やや多	やや多	多
野菜・花き全般	オオタバコガ	多	多	多

お問い合わせ先

TEL (083) 927-4006

FAX (083) 927-0214

E-mail a172011@pref.yamaguchi.lg.jp

Ⅱ 予報

【主要病害虫】

イ ネ

1 いもち病（葉いもち）

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期・防除の目安
	平年比	前年比	
平年並	平年並	前年並	発病初期

(2) 予報の根拠

ア 本田での初発生は、6月27日（平年6月26日）で平年並みであった（±）。

イ 6月下旬の巡回調査では、発生ほ場率0%（平年0.4%）、発病株率0%（平年0.0%）で平年並みであった（±）。

ウ 気象予報では、7月の気温は高く、降水量はほぼ平年並み、日照時間は平年並みか多い（-）。

(3) 防除対策

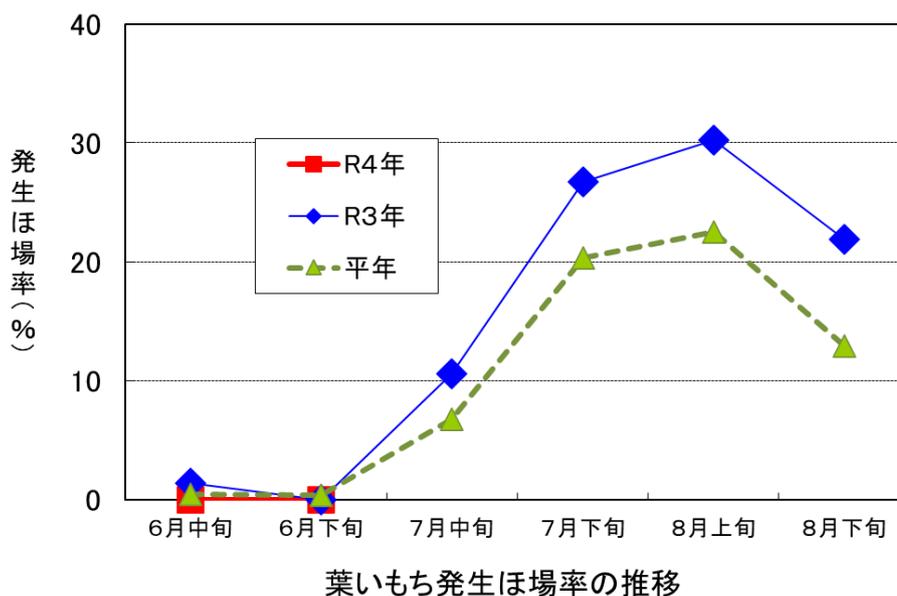
<耕種的防除>

ア 補植用の置苗は、早急に処分する。

イ 窒素肥料の多用は避ける。

<防除判断>

急性型病斑を認めた場合は、治療効果のある薬剤で直ちに防除する。



2 紋枯病

(1) 予報内容

予想発生量	防除時期・防除の目安
やや多	幼穂形成期～穂ばらみ中期（出穂25～14日前頃）

(2) 予報の根拠

ア 前年の発生量はやや多であり、伝染源となる菌核の量もやや多いと考えられる（+）。

イ 気象予報では、7月の気温は高く、降水量はほぼ平年並み（+）。

(3) 防除対策

<耕種的防除>

窒素肥料の多用は避ける。

<防除判断>

防除適期は幼穂形成期～穂ばらみ中期（出穂25～14日前頃）で、穂ばらみ中期の発病株率15～20%以上が防除の目安である。

<防除のポイント>

出穂期以降は薬剤散布の効果が劣るので、適期防除を徹底する。

3 縞葉枯病（ヒメトビウンカ）

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期・防除の目安
	平年比	前年比	
平年並	平年並	前年並	幼穂形成期までに発病が多い場合

(2) 予報の根拠

ア これまでの調査では、縞葉枯病の発生は確認されていない（-）。

イ 6月下旬の巡回調査では、ヒメトビウンカの発生ほ場率8.4%（平年6.4%）、10株当たり虫数 0.7頭（平年0.2頭）で平年に比べやや多かった（+）。

ウ 気象予報では、7月の気温は高く、降水量はほぼ平年並（+）。

(3) 防除対策

<防除判断>

幼穂形成期までに発病が多い場合は、ウンカ類に効果のある薬剤で直ちに防除する。

<防除のポイント>

今後の発生予察情報に注意する。

4 セジロウンカ

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期・防除の目安
	平年比	前年比	
やや少	やや少	多	7月中旬までは10頭以上/株（成虫）、その後穂ばらみ中期までは50頭以上/株（成幼虫）

(2) 予報の根拠

- ア 初確認は、5月31日（平年6月4日）で平年並みであった（±）。
- イ 予察灯における誘殺数（4か所、5月28日～6月27日合計）は13頭（平年45.4頭）で平年に比べ少なかった（－）。
- ウ 6月下旬の巡回調査では、発生ほ場率2.4%（平年14.8%）、10株当たり虫数0.0頭（平年0.5頭）で平年に比べやや少なかった（－）。
- エ 気象予報では、7月の気温は高く、降水量はほぼ平年並み（＋）。

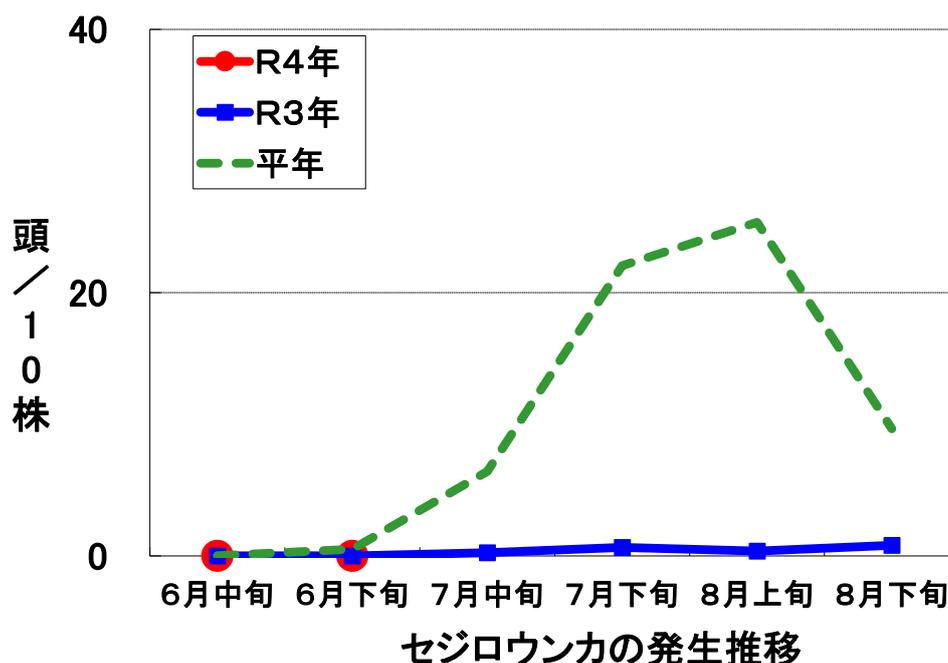
(3) 防除対策

<防除判断>

- ア 防除の目安は、飛来がみられる7月中旬頃までは成虫で株当たり10頭以上である。
- イ 穂ばらみ中期（出穂14日前頃）までに成虫、幼虫を含めて株当たり50頭以上の発生があれば、褐変穂を生じる恐れがあるので薬剤防除を行う。

<防除のポイント>

- ア 今後も飛来する可能性があるため、ほ場での発生や発生予察情報に注意する。
- イ 飼料用米では多発する場合があるので注意する。



5 トビイロウンカ

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期・防除の目安
	平年比	前年比	
平年並	平年並	前年並	7月中旬までは10頭/100株(成虫)、7月下旬～8月上旬は20頭/100株(成幼虫)以上

(2) 予報の根拠

- ア 初確認は、6月27日（平年7月10日）で平年並であった（±）。
- イ 予察灯における誘殺数（4か所、5月28日～6月27日合計）は、0頭（平年0.1頭）で平年並みであった（±）。
- ウ 6月下旬の巡回調査では、発生が確認されていない（±）。
- エ 気象予報では、7月の気温は高く、降水量はほぼ平年並み（+）。

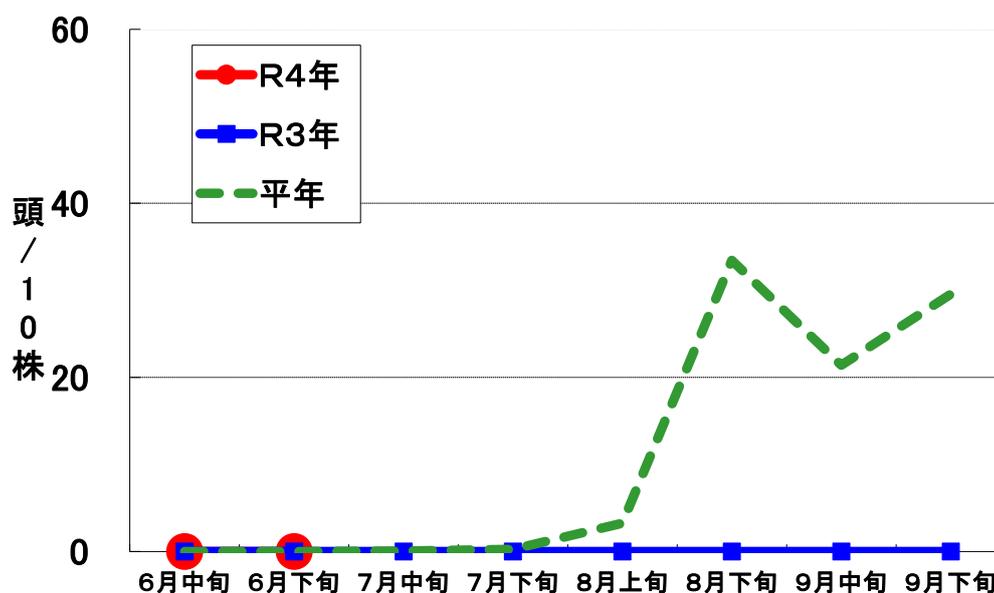
(3) 防除対策

<防除判断>

- ア 防除の目安は、6月下旬～7月中旬（飛来時）は10頭/100株、7月下旬～8月上旬（成幼虫）は20頭/100株以上である。

<防除のポイント>

- ア 今後も飛来する可能性があるため、ほ場での発生や発生予察情報に注意する。特に、直播など箱施用剤を使用していないほ場では注意が必要である。
- イ 出穂後は薬剤が株元にかかりにくいため、出穂前防除を徹底する。



トビイロウンカの発生推移

6 コブノメイガ

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期・防除の目安
	平年比	前年比	
平年並	平年並	前年並	成虫の払い出しで5頭/m ² 以上

(2) 予報の根拠

- ア 6月30日現在、確認されていない（平年初確認7月3日）（－）。
- イ 山口市のフェロモントラップによる誘殺数（6月6日～30日）は、0頭（平年1.6頭）で平年並みであった（±）。
- ウ 6月下旬の巡回調査では発生ほ場率0%（平年0.1%）、被害葉率0%（平年0.0%）で平年並みであった（±）。
- エ 気象予報では、7月の気温は高く、降水量はほぼ平年並み（+）。

(3) 防除対策

<耕種的防除>

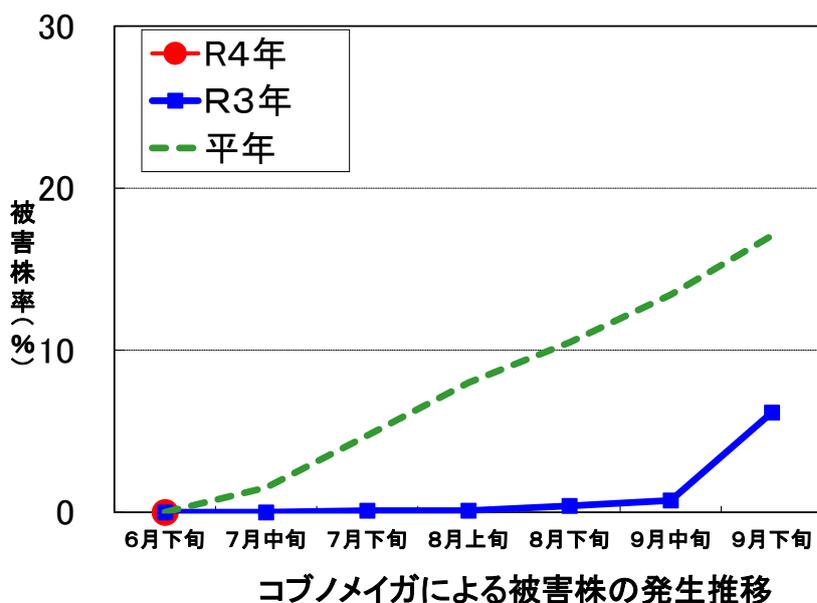
葉色の濃いイネに好んで産卵するため多肥を避ける。

<防除判断>

- ア 成虫の払い出し調査で5頭/m²以上であれば粉剤は7日後に、粒剤は直ちに散布する。
- イ 減収が問題となるのは、出穂期に上位2葉の被害葉率が15%（株率80%程度に相当）以上とされている。

<防除のポイント>

今後も飛来する可能性があるため、ほ場での発生や発生予察情報に注意する。



7 斑点米カメムシ類

7月9日～7月17日は県内一斉草刈り推進期間

(https://www.pref.yamaguchi.lg.jp/cms/a17201/nougyou/shigen/gi_jyutusiryou.html)

(1) 予報内容

予想発生量	現況		防除時期・防除の目安
	平年比	前年比	
やや多	やや多	多	穂揃期と穂揃期7日後の2回防除が基本 (粉剤または液剤の場合)

(2) 予報の根拠

ア 予察灯における誘殺数(4か所、5月26日～6月25日合計)は、472頭(平年139.3頭)で平年に比べ多かった。内訳は、クモヘリカメムシ3頭(平年2.9頭、平年並)、アカスジカスミカメ319頭(平年90.5頭、多)、アカヒゲホソミドリカスミカメ142頭(平年42.3頭、多)、ミナミアオカメムシ5頭(平年2.6頭、やや多)、アオクサカメムシ3頭(平年1.0頭、多)、イネカメムシ0頭(平年0.2頭、平年並)であった(+)

イ 極早期栽培地域におけるイネ科雑草地の20回すくい取り調査ではアカスジカスミカメ、ホソハリカメムシ、クモヘリカメムシ、シラホシカメムシ等が確認され、平年並みの発生であった(±)。

ウ 気象予報では、7月の気温は高く、降水量はほぼ平年並(+)

(3) 防除対策

<耕種的防除>

出穂2週間前までに畦畔等の草刈りを実施し、それ以後は、エノコログサ、メヒシバ、ヒエ等のイネ科雑草の穂がでないよう管理するとより効果が高い。

<防除のポイント>

ア 穂揃期(80～90%が出穂)と穂揃期7日後の2回の薬剤防除を徹底する。

イ 薬剤を散布した後もほ場でカメムシ類の発生が見られる場合は、さらに7日後に追加防除を実施する。

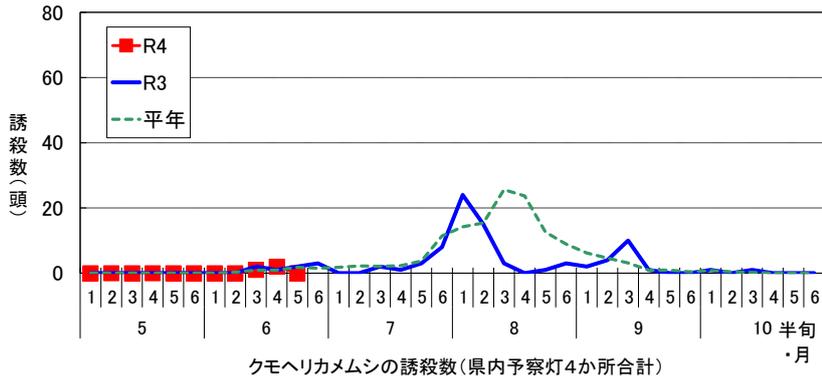
ウ 周囲よりも出穂の早いほ場、休耕地や雑草地周辺のほ場、ヒエ等の雑草の多いほ場はカメムシ類による被害が多くなるので防除を徹底する。

エ 地域で一斉防除を実施すると効果が高い。

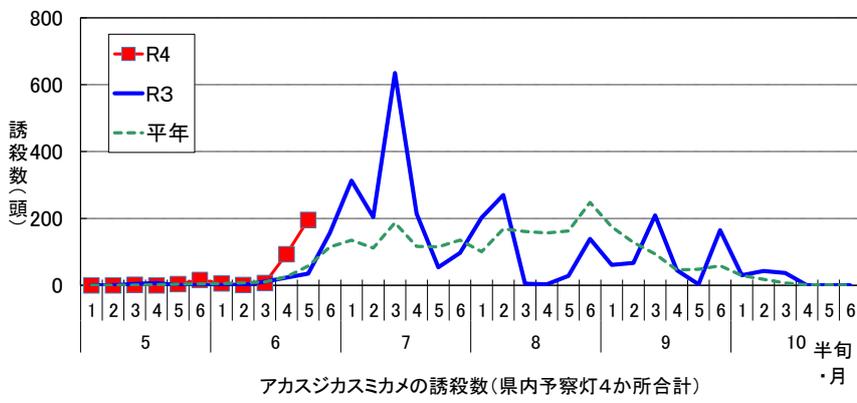
オ 畦畔に出穂したイネ科雑草がある場合は畦畔も含めて防除を実施する。

カ 粒剤で防除を行う場合は、粉剤よりも3～4日早く散布する。ただし、大型のカメムシ類に対しては防除効果が劣る。

キ 近年、イネカメムシが増加しているため、本種の発生が多い地域ではほ場への飛来に注意し、不稔穂の発生を防ぐために、防除適期である出穂期に送れないよう、出穂期の7日前と穂揃期の薬剤防除を実施する。



クモヘリカメムシ
体長15-17mm



アカスジカスミカメ
体長4.6-6mm

カンキツ

1 かいよう病

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期・防除の目安
	平年比	前年比	
平年並	平年並	前年並	幼果期及び台風の襲来前

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬の巡回調査では、発生ほ場率10.5%(平年9.1%)、発病葉率0.5%(平年0.7%)、発病果率0%(平年0.0%)で平年並みであった(±)。

イ 気象予報では、7月の降水量はほぼ平年並(ー)。

(3) 防除対策

<防除判断>

ア 本病が発生しているが、6月下旬に防除を実施していない場合は、7月上旬に防除を実施する。

イ 本病が発生し、既に6月下旬の防除を実施した場合は、新たな病斑の増加が認められる場合に防除を実施する。

ウ 台風襲来の恐れがある場合は、事前に防除を実施する。

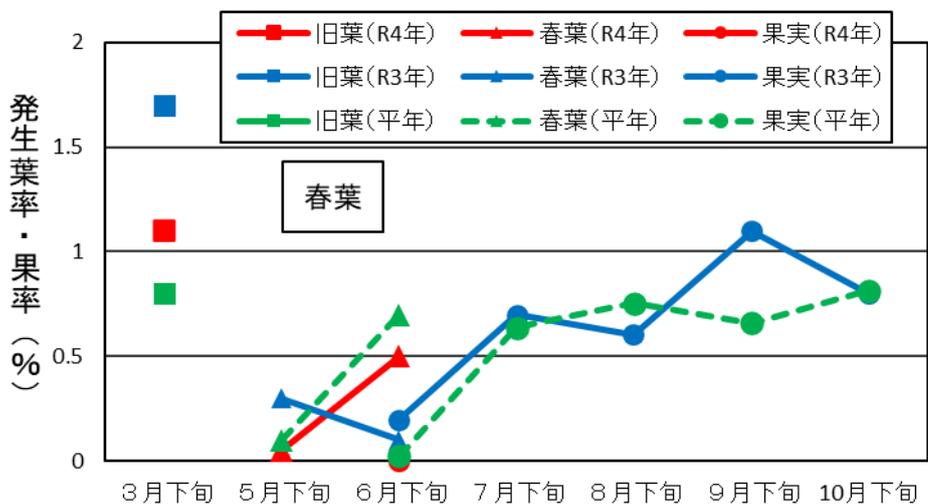
<防除のポイント>

ア 発病した枝や葉は、伝染源となるので除去する。

イ 防風樹や防風ネットなどの防風対策を実施し、茎葉の損傷を防ぐ。

ウ ICボルドー66Dは、高温期に使用すると薬害を生じやすいので、7月から9月の間は使用しない。

エ 夏秋梢はミカンハモグリガの被害が発生しやすく、本病の発生を助長するので、できるだけ除去する。幼木や隔年交互結実園の遊休樹など夏秋梢を残す場合は、ミカンハモグリガの防除を徹底する。



カンキツかいよう病の発生推移

2 黒点病

(1) 予報内容

予想発生量	現況		防除時期・防除の目安
	平年比	前年比	
やや少	やや少	少	防除後の累積降水量が200～250mmに達したとき。降水量が少ない場合は薬剤散布後1か月を経過したとき。

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬の巡回調査では、発生ほ場率5.3%(平年26.1%)、発病果率0.1%(平年1.9%)で平年に比べやや少なかった(－)。

イ 気象予報では、7月の降水量はほぼ平年並(±)。

(3) 防除対策

<防除判断>

予防散布が基本なので、予報内容の防除時期に合わせて防除を実施する。

<防除のポイント>

ア 樹冠内の枯れ枝や放置された剪定枝は本病の伝染源となるので、園外に持ち出し、処分する。

イ 「せとみ」は病斑が大きくなり、外観品質に及ぼす影響が大きいため、適期防除に努める。

3 ミカンハダニ

(1) 予報内容

予想発生量	現況		防除時期・防除の目安
	平年比	前年比	
多	多	多	雌成虫の寄生葉率30～40%以上、または雌成虫1葉当たり0.5～1頭以上

(2) 予報の根拠

ア 下旬の巡回調査では、発生ほ場率42.1%(平年30.2%)、寄生葉率13.7%(平年3.8%)で平年に比べ多かった(+)

イ 気象予報では、7月の気温は高く、7月の降水量はほぼ平年並(+)

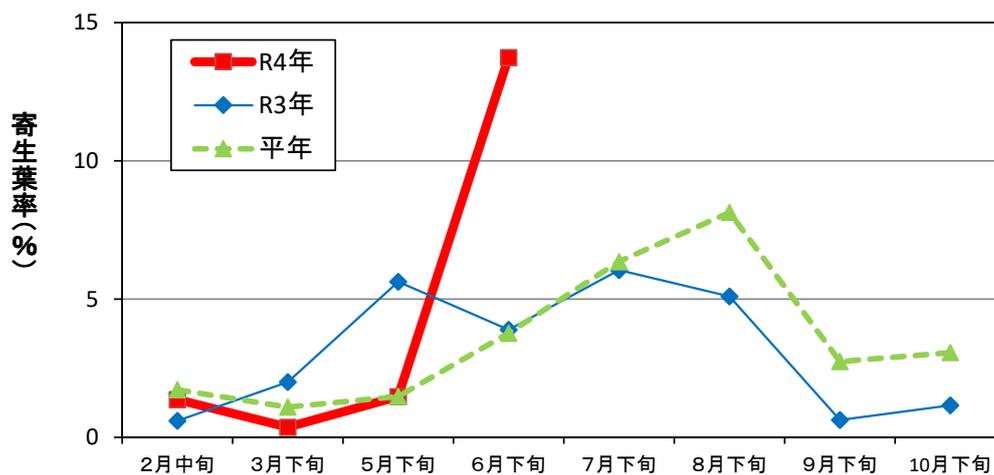
(3) 防除対策

<防除判断>

雌成虫の寄生葉率30～40%以上、または雌成虫1葉当たり0.5～1頭以上の場合、防除を実施する。

<防除のポイント>

発生量はほ場によって大きく異なる。定期的にはほ場を見回り、発生状況を確認する。



ミカンハダニの発生推移

4 ミカンサビダニ

(1) 予報内容

予想発生量	現況		防除時期・防除の目安
	平年比	前年比	
平年並	平年並	前年並	常発園または昨年多発した園では直ちに、それ以外の園では梅雨明け直後

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬の巡回調査では、発生ほ場率0%(平年0%)、被害果率0%(平年0%)で平年並みであった(±)。

イ 気象予報では、7月の気温は高く、7月の降水量はほぼ平年並(+)

(3) 防除対策

<防除判断>

前年の発生量が大きな影響を与えるため、常発園または昨年多発した園では早めの防除が必要。それ以外の園では梅雨明け直後に薬剤散布を行う。

<防除のポイント>

効果の高い薬剤(サンマイト水和剤、ダニカット乳剤、コテツフロアブル等)を使用する。薬剤抵抗性の発達を防止するため、同系統薬剤の連用は避ける。

ナ シ

1 黒斑病

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期・防除の目安
	平年比	前年比	
少	少	前年並	7～10日間隔で防除を行う。

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬の巡回調査では、発生ほ場率0%(平年22.7%)、発病葉率0%(平年0.1%)、発病新梢率0%(平年0.8%)で、平年に比べ少なかった(ー)。

イ 気象予報では、7月の降水量はほぼ平年並み(±)。

(3) 防除対策

<防除のポイント>

ア ほ場を定期的に見回り、落下した果実は拾い集め、園外に持ち出し処分する。

イ 7月は、徒長枝での発病が多くなる時期なので、徒長枝の先端まで薬剤がかかるよう、丁寧に散布する。

ウ ポリオキシシン剤、ストロビー剤では耐性菌が出現しているため、防除の後必ず防除効果を確認し、防除効果が劣る場合は、他の薬剤を使用する。

2 黒星病

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期・防除の目安
	平年比	前年比	
平年並	平年並	少	7月上旬ごろまで

(2) 予報の根拠

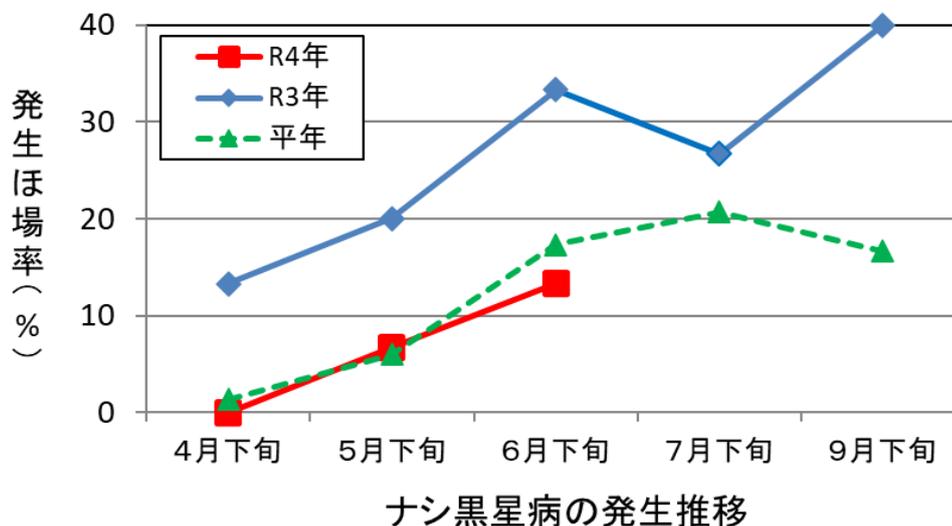
ア 6月下旬の巡回調査では、発生ほ場率13.3%(平年17.3%)、発病葉率0.6%(平年0.7%)で平年並みであった(±)。

イ 気象予報では、7月の降水量はほぼ平年並(±)。

(3) 防除対策

<防除のポイント>

- ア 発病した果実や葉は伝染源になるので、見つけ次第除去するとともに、ほ場外に持ち出し、適切に処分する。
- イ 本病が発生している場合は、治療効果があるストロビルリン剤（ストロビー、アミスター等）、アミド系剤（フルーツセイバー、アフェット等）で直ちに防除を実施する。
- ウ 7月は、本病原菌が「幸水」の果実に感染しやすくなる時期なので、防除を徹底する。
- エ 薬剤が果実と新梢にかかるよう、丁寧に散布する。
- オ 薬剤耐性の発達を防止するため、同一系統の薬剤を連用しない。
- カ ベンレート剤、ルビゲン剤では耐性菌が出現しているので、防除の後必ず防除効果を確認し、防除効果が劣る場合は、他剤を使用する。



果樹全般（モモ、ナシ、リンゴ）

1 カメムシ類（チャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシ、クサギカメムシ）

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期・防除の目安
	平年比	前年比	
やや多	やや多	多	園地への飛来を確認した時

(2) 予報の根拠

ア 予察灯における誘殺数(5月26日～6月25日、県内5か所合計)は 151頭（平年 98.6頭）で平年に比べやや多かった（+）。

イ フェロモントラップによるチャバネアオカメムシの誘殺数(県内5か所、5月26日～6月25日)は1,838頭（平年1,001頭）で平年に比べやや多かった（+）。

ウ スギ・ヒノキの毬果量調査（県下6か所、6月下旬調査）では、スギ、ヒノキとも着果程度は平年並みであった（±）。

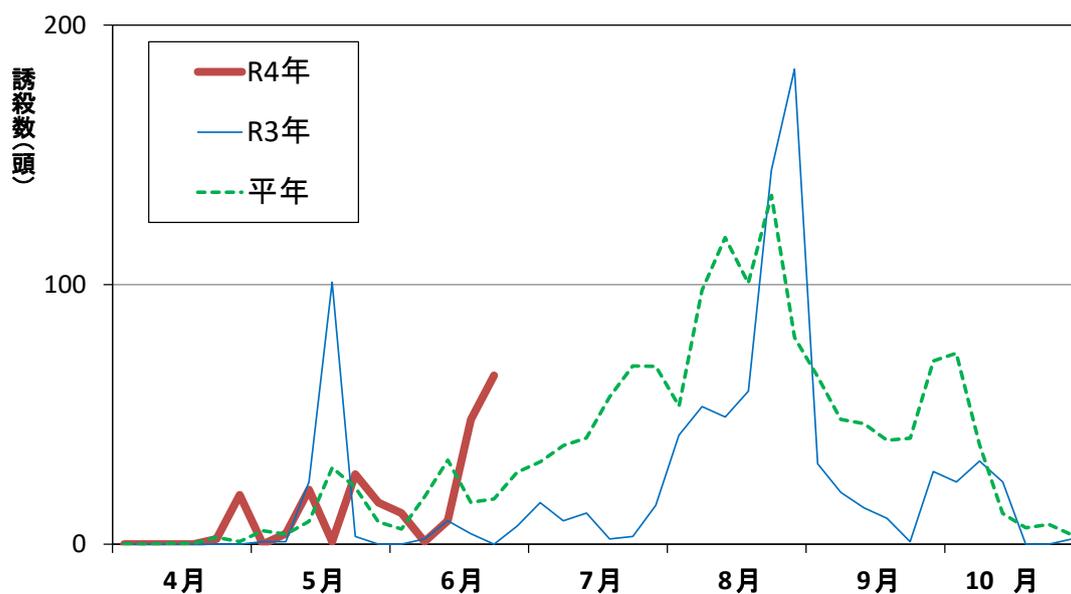
エ 気象予報では、7月の気温は高く、降水量はほぼ平年並（+）。

(3) 防除対策

<防除のポイント>

ア 有袋栽培であっても、果実肥大により果実が袋に接した時期に加害されるので注意する。

イ カメムシ類に対する薬剤散布によって、ハダニが増殖する可能性があるため、発生状況に注意する。



果樹カメムシ類の予察灯への誘殺数推移(県内5地点合計)

野菜・花き全般

1 オオタバコガ

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
多	多	多	若齢幼虫期

(2) 予報の根拠

ア 山口市大内のフェロモントラップにおける誘殺数（6月1日～30日）は、55頭（平年11.1頭）で平年に比べ多かった（+）。

イ 気象予報では、7月の気温は高く、降水量はほぼ平年並（+）。

(3) 防除対策

<耕種的防除等>

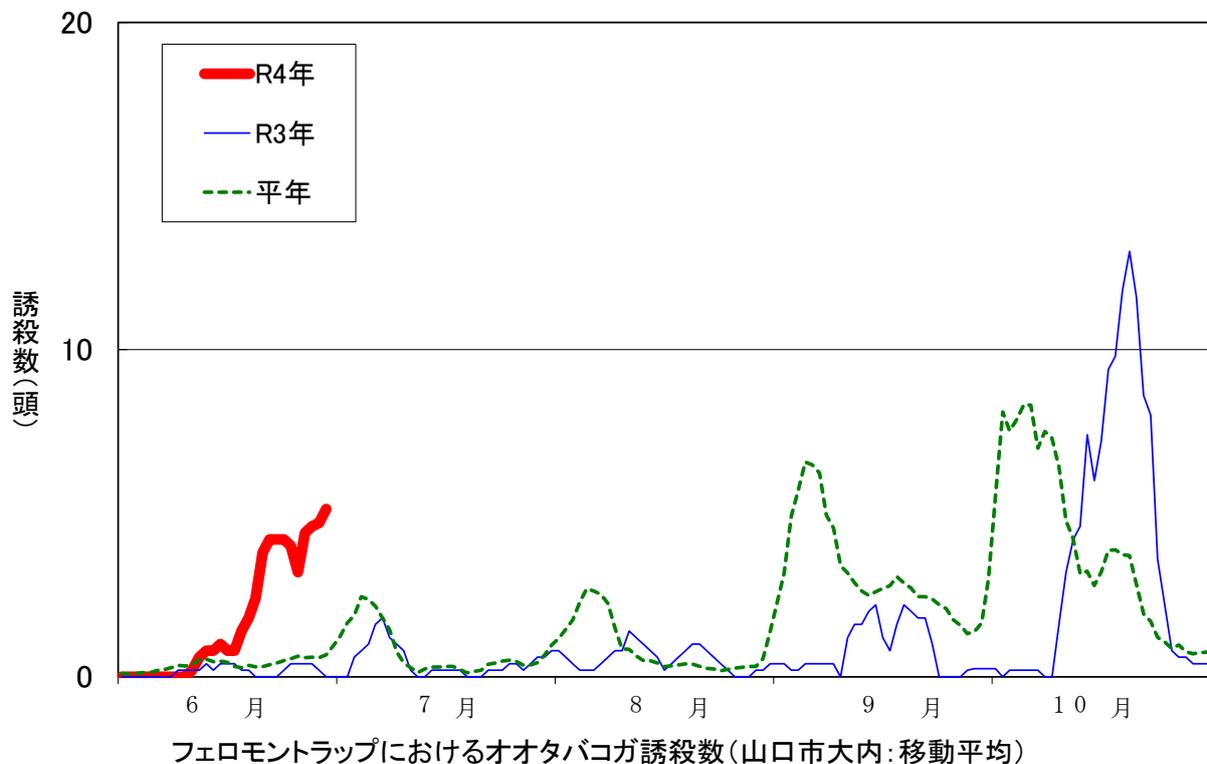
幼虫は見つけ次第捕殺する。

<防除のポイント>

ア 定期的にはほ場をよく観察し、発生が認められた場合には直ちに防除を行う。

イ 中～老齢幼虫は花蕾や果実に食入し、防除効果が劣るので、若齢幼虫時の防除を徹底する。

ウ 薬剤抵抗性を発達させないため、同一系統の薬剤の連用は避ける。



【その他の病害虫】

作物名	病害虫名	予 想 発 生 量	現 況		発生ほ場率		備 考
			平年比	前年比	本年 (%)	平年 (%)	
イネ	ツマグロ ヨコバイ	平年並	平年並	多	8.4	8.1	
	イチモン ジセセリ (イネツ トムシ)	少	少	前年並	0	4.8	防除適期：予想若齢幼虫最盛期（7月下旬）葉色が濃く軟弱な生育の場合被害が大きい。
	ニカメイ ガ	平年並	平年並 (予察灯)	前年並 (予察灯)	—	—	チョウ目害虫に効果のある長期持続型箱施用剤を利用している場合追加防除は必要ない。
カンキツ	そうか病	やや多	やや多	多	10.5	2.5	発病葉、枝は除去してほ場外に持ち出し、適切に処分する。

Ⅲ 参考

1 予報の見方

(1) 病虫害発生量の基準（原則として過去10年間の発生量と比較）

ア 平年比

多	過去10年間で最も多かった年と同程度以上の発生
少	〃 で最も少なかった年と同程度以下の発生
やや多	〃 で2～3番目に多かった年と同程度の発生
やや少	〃 で2～3番目に少なかった年と同程度の発生
平年並	〃 で標準的にみられた発生（上記4項目を除くもの）

注：過去の発生量との比較を表わすもので、被害や防除の必要性とは異なる）

イ 前年比

多	平年比の5段階評価で区分し、前年の評価より多い発生
少	〃 前年の評価より少ない発生
前年並	〃 前年の評価と同等の発生（上記2項目を除くもの）

(2) 病虫害発生時期の基準（原則として過去10年間の発生時期と比較）

早 い	過去10年間の平均値より6日以上早い
遅 い	〃 より6日以上遅い
やや早い	〃 より3～5日早い
やや遅い	〃 より3～5日遅い
平年並	〃 を中心として前後2日以内

(3) 予報根拠における発生要因の評価基準

+	発生を助長する要因
±	発生の助長及び抑制に影響の少ない要因
-	発生を抑制する要因

2 気象予報

(1) 概要

1 か月気象予報（6月30日福岡管区气象台発表）

予 報	低 い (%) 少 ない	平年並 (%)	高 い (%) 多 い
気 温	10	40	50
降 水 量	40	30	30
日 照 時 間	20	40	40

週ごとの気温傾向

予 報	低 い (%)	平年並 (%)	高 い (%)
1 週 目	10	30	60
2 週 目	20	30	50
3～4 週 目	20	40	40